

コートジボワール共和国の日本語教育について

ヤオザカリー

戸田国際財団

1 要旨

本稿は、コートジボワール共和国における日本語教育の現状と課題、そして近年の発展的動向について報告するものである。近年、同国では大学および民間機関による日本語教育が急速に拡大し、日本語学習者数が増加している。その背景には、日系企業の進出、人材育成への関心の高まり、そして戸田国際財団などの民間団体による支援がある。一方で、日本語教師の不足や教育環境の整備といった課題も依然として残されている。本稿では、主要な教育機関の紹介とともに、コートジボワールにおける日本語教育の発展の方向性を考察する。

2 コートジボワールについて

コートジボワール共和国は西アフリカに位置し、人口は約3,200万人である（2024年時点）。そのうち約30%が外国人であり、35歳未満の若年層が全人口の77%を占めている。公用語はフランス語であるが、その他60以上の民族語が使用されている。多様な文化と民族が共存する社会であり、外国人観光客や投資家を歓迎する国民性を有する。こうした社会的背景が、日本語や日本文化への関心の高まりにもつながっている。主要産業としては、世界最大のカカオ生産国であるほか、コーヒーやカシューナッツも主要な輸出品として挙げられる。2011年の内戦終結と新政権の発足以降、治安の安定を背景に2012年からは持続的な経済成長を遂げており、経済首都アビジャンは西アフリカの経済的中核都市の一つとして注目を集めている。

3 コートジボワールの日本語教育について

3.1 コートジボワールにおける主要な日本語教育機関

3.1.1 ブアケ大学ジャパンスペース (Espace Japon, Université de Bouaké)

ブアケ大学における日本語専攻は2012年に開設された。2025年現在の学生数は約100名、教員は1名 Prof. Guy KAUL（ギー・コール教授）である。2025年3月には戸田国際財団と覚書（MoU）を締結し、同年6月には在コートジボワール日本大使館により教室の整備が行われた。

3.1.2 アビジャン日本語学院 (Abidjan Nihongo Institute, ANI)

ANIは2019年9月19日に設立され、現在1,250人の学習者と6名の教師が在籍している。アビジャン、マン、ブアケなど国内6カ所にセンターを持ち、全国的な日本語および日本文化の普及を目指している。責任者はニャウイ氏である。

3.1.3 ココディ大学ジャパンコーナー (Japan Corner, Université de Cocody)

2023年6月1日にココディ大学(フェリックス・ウフェ=ボワニ大学)構内に設立されたジャパンコーナーは、日本語の授業や文化授業、日本人との交流活動を実施している。2024年12月には戸田国際財団とMoUを締結し、2025年4月より日本人教師とコートジボワール人教師が派遣され、日本語の授業や日本文化・日本のマナー・ビジネスなどの授業を行っている。フェリックス・ウフェ=ボワニ大学と戸田国際財団の連携により、学習者数は倍増した。日本とアフリカの架け橋となる人材育成を目指す拠点として注目されている。

4. 戸田国際財団と日本語教育支援

戸田建設は約30年前から西アフリカ地域でODAプロジェクトに携わっており、その経験を基盤として、2023年に人材育成を目的とする戸田国際財団を設立した。財団は日本語教育の振興と若者の就業支援を目的に、コートジボワールの3つの国立大学と覚書(MoU)を締結している。すでにフェリックス・ウフェ=ボワニ大学では、2025年4月より日本語教師の派遣が始まっており、他の2大学でも今後、日本語教育環境の整備や人的支援が進められる予定である。こうした取り組みにより、コートジボワール全体の日本語学習者数の増加や、地域社会と日本との連携強化が期待されている。

5. 現状の課題と今後の展望

日本語教育の需要は高まっているものの、依然として以下のような課題が存在する。

教師の不足：日本語を専門的に教えられる現地教員が少なく、授業の質の均一化が難しい。

設備面の問題：一部教室では電力不足など、学習環境の整備が不十分である。

キャリアパスの不明確さ：日本語を学んだ後の就職先が限られており、学習継続の動機付けが課題となっている。

一方で、戸田国際財団をはじめとする日系企業や日本大使館の支援により、これらの問題は少しずつ改善に向かっている。今後は、現地教員の育成、日本語教育を通じた職業訓練プログラムの開発、そして官民学連携の強化が求められる。

6. まとめ

コートジボワールにおける日本語教育の歩みは、決して順風満帆なものではなかった。2011年の内戦終結後も教育環境の整備は容易ではなく、日本語教育は限られた人材と厳しい条件のもとで続けられてきた。そのような状況の中で、ブアケ大学のガイ・コール（Guy Kaul）教授が、日本語教育の火を絶やさぬように情熱をもって取り組み続けたことが、今日の日本語教育の発展の原点となっている。教授の献身的な努力により、日本語教育が学内で維持され、それが後にニャウイ氏によるアビジャン日本語学院（ANI）の設立へとつながった。こうした現地教育者の粘り強い活動が、コートジボワールにおける日本語教育の礎を築いたといえる。さらに、2012年以降の安定した経済成長を背景に、コートジボワールに進出する日本企業が増加し、それが2023年の戸田国際財団の設立、そして2025年4月からの同財団による現地大学での日本語教育支援へと結びついた。今後は、こうした現場の努力を継承しつつ、教育の質を高め、持続可能な支援体制を構築していくことが求められる。